様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月 16 日現在

研究種目：　若手研究（B）
研究期間：　2007 年度　～　2008 年度
課題番号：　19720120
研究課題名（和文）　国際結婚夫婦のコミュニケーション認識と「多言語・多文化共生」に向けての課題
研究課題名（英文）　The communication in Intermarriage Couples and the issues for Symbiosis

研究代表者
伊藤　孝恵（ITO TAKAE）
山梨大学・留学生センター・講師
研究者番号：10348104

研究成果の概要：
国際結婚夫婦のコミュニケーション態度に関する質問紙調査を、国際結婚夫婦並びに日本人同士夫婦に対し実施した。その目的は、日本における国際結婚夫婦のコミュニケーションに対する認識の特徴、特に外国人妻の認識の特徴を明らかにし、これに家族社会学の見地を加え、国際結婚夫婦における「多言語共生」「対等で互いの違いを認め合う夫婦間コミュニケーション」を目指すことにある。具体的には、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度に対する認識の特徴を、日本人同士の夫婦と比して明らかにし、コミュニケーション態度とコミュニケーションに対する印象・情動との関連性を探る。
質問紙は、日本語版のほか、英語版、中国語版、韓国語版、ポルトガル語版、スペイン語版、タイ語版を作成し、対象者が回答しやすいよう配慮した。質問紙は、山梨県を中心にその周辺の市で配布した。回収されたデータは、入力・集計した。今後、分析を進め、論文としてまとめる予定である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	90,000	1,090,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：　異文化コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

今日日本において増加、多様化している国際結婚の約 7 割が、「夫日本人、妻外国人」で、その外国人妻の多くは、フィリピン、韓国・朝鮮、中国といったアジア諸国出身者である。その増加、多様化の背景には、国際的な人口の流動化とともに、送り出し側、受け入れ側の社会的・経済的事情がある。外国人妻は、国家間の経済格差上にある差別意識や、日本社会・文化への同化圧力の中で、言葉や価値観、習慣等の違いに戸惑うばかりでなく、家庭内や親子間でのコミュニケーション・ギャップやエスニック・アイデンティティの揺らぎ、日本において依然根強い性別役割分業にも直面している。その意味で国際結婚の問題は、日本のジェンダーや家族問題をも含んでいるといえ、外国人妻個人や国際結婚家族のみならず、日本社会全体の問題として取り組むべき課題でもある。

「結婚」が全人格的な様相を帯びている以上、生活上のあらゆる価値観、習慣、感情が関わることが問題として上るが、その根本的な解決の糸口は夫婦間のコミュニケーションにある。しかしながら、これまで国際結婚夫婦のコミュニケーションの重要性と問題性は数多く指摘されているものの、これに焦点を当て、特に外国人妻が被っているジェンダーや言語面での力関係について指摘した研究は見られない。

そのため本研究において、国際結婚の問題について、夫婦間のコミュニケーションに焦点を絞り、「異文化間コミュニケーション」及び「ジェンダー」の見地からその意識の実態を明らかにすることは、夫婦関係のみならず、彼らを取り巻く日本社会が「多言語・多文化共生」社会を目指す上で必要であると思われる。

２．研究の目的

本研究は、日本における国際結婚夫婦のコミュニケーションに対する認識の特徴、特に外国人妻の認識の特徴を明らかにし、これに家族社会学の見地を加え、国際結婚夫婦における「多言語共生」「対等で互いの違いを認め合う夫婦間コミュニケーション」を目指すことを目的とする。

(1) 国際結婚夫婦、特に外国人妻のコミュニケーションスタイル・態度や情動・印象の特徴をそれぞれ明らかにする

(2) 夫婦間コミュニケーションスタイル・態度と情動・印象の関連性を明らかにする

(3) 夫婦間コミュニケーションスタイル・態度と、「夫婦間での取り決め」の関連性を明らかにする

(4) 国際結婚夫婦の持つ多層性・複合性を考慮し、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度や情動・印象について、「異文化間コミュニケーション」及び「ジェンダー」の二視点から分析・考察する

３．研究の方法

日本に在住する国際結婚夫婦（夫か妻いずれかが日本人）とその周辺の日本人同士の夫婦を対象に、質問紙調査を行った。

質問紙の作成にあたっては、国際結婚夫婦3組と日本人同士夫婦3組に対し、反構造化面接による予備調査を行った。この予備調査の結果と、夫婦間コミュニケーション及び異文化間コミュニケーションに関する先行研究を参考に、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の特徴を明らかにするための質問25項目を作成した。また、コミュニケーションは夫婦間で双方向に行われるものであることから、質問25項目について、「自分から配偶者へのコミュニケーション態度」、並びに「配偶者から自分へのコミュニケーション態度」の双方から別々に尋ねた。そして、各質問に対し、「とてもそう思う（5点）」「そう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「そう思わない（2点）」「まったくそう思わない（1点）」の5段階で評定を求めた。

質問紙の配布は、山梨県及びその周辺の市で行い、主に地域の日本語教室や山梨県の市町役場に配布を依頼した。回答後は封筒に入れ、そのまま調査者宛に投函してもらう形で回収した。調査時期は2008年5月から11月までであった。その後、必要に応じて、聞き取り調査を実施する。

４．研究成果

質問紙の作成（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版、ポルトガル語版、スペイン語版、タイ語版）、配布、回収を行い、データ分析を行った。このうち、夫、妻とも回答し夫婦単位での回答が成立しているものを、夫婦単位の分析における有効回答として扱った。

さらに、夫婦が出会った方法として、「恋愛」「友人・知人の紹介」と「お見合い」「結婚斡旋専門業者」とでは、特に国際結婚において両者の間でその夫婦関係に違いがあると考えられることから、本研究では後者をその対象として除外した。その結果、分析対象として有効な回答数は、国際結婚夫婦45組、日本人同士夫婦40組の合計85組170名であった。

本研究の分析対象者は、国際結婚夫婦 45組（90名）、日本人同士夫婦40組（80名）の、計85組（170名）である。国際結婚夫婦のうち、夫が日本国籍で妻が外国籍の夫婦は36組、夫が外国籍で妻が日本国籍の夫婦は9組であった。国際結婚夫婦のうち、外国籍の配偶者の国籍は、外国人夫は、アメリカ、中国が各2名で、バングラディッシュ、ウガンダ、セネガル、タイ、フィリピンが各1名、外国人妻は中国が17名で最も多く、次いでフィリピンが6名、タイ、ブラジル、台湾が各2名で、ほか韓国、ラオス、ボリビア、ペルー、アメリカ、ウクライナが各1名であった。

また、夫婦間のコミュニケーションで使用される言語については、「日本人夫、外国人妻」の夫婦では、夫の母語である日本語が大半を占めていた。そして、日本人夫で妻の母語が「ある程度できる」「よくできる」と答えた人は、36名中5名に留まった。つまり、日本における国際結婚のうちおよそ7割を占めるとされる「日本人夫、外国人妻」の夫婦の間では、妻の母語が夫に理解され、会話で使用されるということは稀であり、大部分が夫の母語であり、夫婦の生活環境で使用されている日本語が、夫婦間においても使用されている実態が浮かび上がった。

今後は、夫婦単位での分析及び、本研究で特に明らかにしたかった外国人妻のコミュニケーション認識とその印象・情動との関連性を分析し、これらの分析結果を論文としてまとめる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕なし

〔学会発表〕なし

〔図書〕なし

〔産業財産権〕なし

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤 孝恵（ITO TAKAE）
山梨大学・留学生センター・講師
研究者番号：10348104

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし